

I. 導入

おはようございます。今日から、私たちの楽しい冒険が始まります。使徒言行録の学びを始めるのです。使徒言行録は史実の記録ですが、スリル満点の小説を読んでいるようです。正義の味方や悪者が登場し、陰謀、奇跡、投獄、脱獄、など盛りだくさんです。また使徒言行録は、古代の書物の中では一番詳細に船の難破の様子を綴っています。使徒言行録の学びをとおして、祝福されるのはもちろん、とても楽しい学びになると期待しています。

使徒言行録の著者はルカです。ルカによる福音書を書いたルカと同じ人物です。このふたつの書簡は、2巻からなる同じ書物とみなすことができます。ルカは、異邦人の信徒で、医者でした。そして、イエスの地上での働きの早期からイエスの弟子だったと考えられます。ルカ 10章でイエスが送りだした70人の弟子たちの名前は聖書に記載されていませんが、教会の伝承に残された名簿には、70人の弟子の一人としてルカの名も含まれています。19世紀後半の画家ジェームス・ティソの絵画では、ルカは思慮深い老人として描かれています。しかし、少なくとも使徒言行録の冒頭部分では、ルカは若さみなぎる青年だと思ってよいでしょう。使徒言行録は、その始まりから紀元63年ごろの30年間にわたる初代教会の歴史を記録しています。それ以降のことは使徒言行録に記されていませんので、そのころにルカがこの書簡を書き終えたと思われます。



使徒言行録もルカによる福音書も、テオフィロという男性に宛てたものです。テオフィロという人物が誰だったかは特定されていませんが、テオフィロという名は、「神の友」という意味です。ルカは明らかにある特定の個人に宛ててこれを書きましたが、私たちは自分自身を「神の友」と考え、私たちに向けて書かれたものとして使徒言行録を読むことができます。使徒言行録は、パウロがローマで投獄され、裁判を待っているところで終わります。そして、ルカによる福音書と使徒言行録はパウロの裁判での弁護に使われる資料として書かれたものだと考える学者もいます。もしそうなら、テオフィロはパウロの弁護士、またはローマの役人だったかもしれません。これはたいへん興味深い仮説で、そのとおりかもしれませんが、立証されていないので、推論にすぎません。では、使徒言行録の1章1-5節を読みましょう。



II. 聖書箇所

1:1 -2 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。1:3 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。1:4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。1:5 ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである。」

III. 教え

この箇所から、2つの重大な出来事の際の時期であることがうかがえます。主イエスの地上での働き、十字架刑、そして復活はすでに起こりました。ペンテコステと聖霊による洗礼は、もうまもなく起ころうとしている出来事です。ルカは、イエスの復活について、「御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れた」と言って、事実であったことを強調しています。しかし、この直後の聖書箇所ではルカが述べるとおり、復活して40日後、イエスは天に昇り、御父のもとへ帰られました。イエスが御父のもとに戻られてから、イエスの地上での働

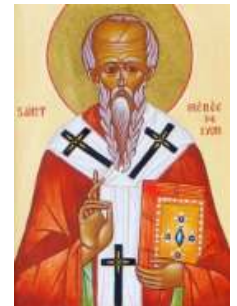


きと聖霊降臨の間に、事実上 10 日間の空白があります。

使徒言行録は、初代教会の時代におけるイエスの使徒たちの言行を綴った記録だと、多くの人は思っています。日本語聖書を初め、聖書の訳によっては、書簡名が「使徒言行録」または「使徒の働き」と訳されているものもあります。それはそれでよいのです。使徒言行録には、使徒たちが何を言い、何をしたかについて、克明に記されています。しかし、この書簡を「聖霊言行録」、「聖霊の働き」とするほうが正確な表現ではないかと思えます。ルカによる福音書では、イエスが物語の主人公でした。しかし、使徒言行録では、物語の主人公は使徒ペテロでも使徒パウロでもありません。それは聖霊なのです。

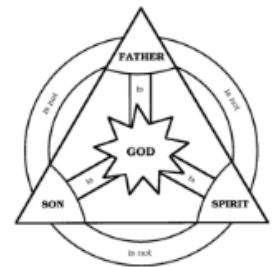


仮に、ルカによる福音書を「イエス言行録」、使徒言行録を「聖霊言行録」と呼んだら、とても理にかなった呼び方です。そのような書簡名ではありませんが、もしそうなら新約聖書の中でルカの書物が一続きのものであることがよくわかるでしょう。そのような書簡名は、神の三位一体のご性質をも思い起こさせてくれます。現代のフランスにあたる場所にあった初代教会の司祭にエイレナイオスという人がいました。エイレナイオスは、紀元 130~202 年の存命中、キリスト教の教理について多くの著述を残しています。その中で、エイレナイオスは、イエスと聖霊について、御父なる神の右腕と左腕のようだと語っています。三位一体の説明としては少し不十分ですが、イエスと聖霊が同格であり、本質的に類似していることをうまく表現しています。



使徒言行録の学びを始めるにあたり、御子なる神の働きと聖霊なる神の働きの類似点に注目していただきたいと思えます。喜びや悲しみを感じる人格のあるお方としてイエスを想像するのはたやすいことですが、聖霊もイエスと同様に人格のあるお方だということは、少し理解しにくいかもしれません。しかし聖霊も、喜びや悲しみを感じ、決断し、行動されるお方なのです。聖書は一貫して、聖霊を抽象的な力ではなく、人格として描いています。

三位一体の神である父、子、聖霊の三位格は、すべて人格を持っています。行動し、考え、感じ、決断します。聖書の神は、三位一体の唯一伸です。その三位格はそれぞれが独立した人格でありながら、本質的に同一であり、完全に一致しています。クリスチャンの中には、イエスを愛しているが、聖霊に少し恐れを感じている人たちがいます。これはおそらく、多くの文化で霊というものを全般的に恐がる慣わしがあるからかもしれません。しかし、聖霊を恐がる必要はありません。イエスと同じように、聖霊は私たちの弁護者だからです。もし私たちがイエスの友であるなら、聖霊も私たちの友であり、味方です。



では、ヨハネ第一 2 章 1 節を見てみましょう。「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」ここでわかるように、イエスは私たちの弁護者です。それは、イエスが敵の告発から私たちを助け守ろうと積極的にしてくださることを意味します。次に、ヨハネ 1 4 章 1 6 節を見てみましょう。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」この箇所では、イエスは、聖霊を私たちの弁護者と呼んでおられます。ここでわかるように、新共同訳では、このふたつの箇所では「弁護者」という同じ単語が使われています。他の訳では、「助け主」「弁護してくださる方」など違う単語を使っている場合もありますが、原語のギリシャ語では「パラクレトス」という同じ単語がこのふたつの箇所では使われています。ですから、イエスと聖霊という二人の弁護者が私たちを助けてくださるのです。

では、ローマ 8 章 3 4 節を見てみましょう。「だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」ここで、イエスが私たちのためにとりなしてくださることが分かります。それはまさに、弁護者の働きです。次に、この箇所とローマ 8 章 26 節を比べてみてください。「同様に、「霊」も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、「霊」自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」聖霊も私たちの弁護者です。そして、イエスと同じように、聖霊も私たちのためにとりなしてくださるのです。



私たちには、常に私たちのためにとりなし、助けてくださる弁護者が二人います。それはすばらしいことです。私たちにはたくさんの助けが必要だからです。イエスは私たちの罪が赦されるために十字架上で死んでくださいました。それにより、イエスを信じる信仰によって、私たちは救いと永遠のいのちという無償の賜物に与ることができます。しかし、イエスを信じて救われた後も、私たちには多くの助けが必要です。それは、私たちが迷った羊のように義の道からすぐにそれてしまうからです。罪に陥る傾向にあり、イエスと聖霊のとりなしを常に必要としています。

先ほど、ヨハネ 14 章 16 節を見ましたが、再度見てみましょう。今回は、17 節もいっしょに見たいと思います。今回は、新改訳を読んでみましょう。ヨハネ 14 章 16-17 節「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」この訳では、ギリシャ語の「パラクレトス」は、「弁護者」ではなく「助け主」と訳されています。ですから、この単語の意味にある程度の幅があり、いくつもの訳し方が可能であることが分かります。しかし、どの訳にも共通しているのは、私たちが必要とするときにともにいて助けてくれる人を表している点です。イエスは、弟子たちを離れて天に戻ったら、もう一人の「パラクレトス」、つまり弟子たちと永遠にともにいてくださる聖霊を送ってくださるよう御父に願うと約束されました。

弟子たちはすでに御霊を知っていました。御霊が彼らとともにおられたからです。しかしイエスは、聖霊が来て、信徒たちの心の中に住んでくださると言われたのです。そして、聖霊はイエスの御霊であるので、御霊をとおして、イエスもまた信徒の心の中に住まわれるのです。ヨハネによる福音書の少し先の章を見てみましょう。イエスが十字架で死に、よみがえられた後、弟子たちにあらわれた場面です。ヨハネ 20 章 19-22 節「その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』 20:20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。 20:21 イエスはもう一度、彼らに言われた。『平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。』 20:22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』

この箇所では、イエスは弟子たちに聖霊を与えておられます。しかし、それ以上に与えられる日が来るのです。今日の聖書箇所である使徒言行録 1 章 4-5 節にはこうあるからです。「そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。 1:5 ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである。』」弟子たちはすでに聖霊をいただいていた。しかし、彼らはまだ聖霊による洗礼は受けていませんでした。それは使徒 2 章で起こる出来事です。この 2 章は、躍動感にあふれる箇所です。

これはどういうことでしょうか。洗礼という言葉は、浸す、とか、完全に浸透または充滿するまでつけておくことを意味します。水で洗礼をするとき、新しいクリスチャンを水に一瞬沈めますが、これは永久に変わったこと、新生、そして、イエス・キリストとの関係が続いていくことを象徴しています。

例として、水とスポンジを持ってきました。これは乾燥した古いスポンジです。これを水にくぐらせたらどうなるでしょう。(スポンジを水にくぐらせる。) 少し水を吸いましたが、まだまだ硬くて乾燥しています。では、このスポンジをしばらく水に浸しておいたらどうなるでしょう。では、水に浸しておいて、話を続けましょう。そして、後でどうなったか見てみましょう。



使徒 2 章で、神が弟子たちの上に御霊をふだんに注がれます。これについては、後日もっと話します。実際、使徒言行録の学びを進めるにあたり、聖霊の洗礼や満たしについて語る機会はたくさん出てくるでしょう。初めに話したように、使徒言行録は「聖霊言行録」と呼んでもおかしくありません。なぜならこの書簡の主人公は聖霊だからです。

受肉において、イエスは神としてのご自身の栄光を捨てて真の人間になられました。その目的は、被造物である人間とともにいることであり、私たちに救いの道を備えるために十字架上で死ぬことでした。

イエスが地上で弟子たちとともにおられたとき、弟子たちはイエスがいつもともにいてくださる臨在という祝福を受けました。そして、イエスが人間の姿でおられたので、弟子たちにわかりやすい方法で教え導くことができました。しかし、人間としてのイエスは、永遠にいつもともにいる存在として弟子たちの心に入ることはできません。弟子たちの心に常に、そして永遠とともにいてくださる神の臨在は、聖霊の働きなのです。

使徒言行録では、弟子たちが働きのために聖霊に満たされて出て行き、その業と教えによって世の中を一変させます。それはエルサレムに始まりました。ユダヤ人とユダヤの祭りのためにエルサレムに来ていた人たちに向けてペテロが語った場面です。そして、使徒を読み進めていくと、弟子たち、特にパウロがローマ帝国およびそのかなたでイエスの良き知らせを語るにつれ、その変化が見えてきます。



IV. 結論

そして、弟子たちが働きのために聖霊に満たされる場面は何度も繰り返し登場します。神が力強く特別な方法で誰かを神の働きに用いられる場合、その働きにその人を備えるため、聖霊の洗礼または満たしを与えてくださいます。

さて、スポンジはどうなったでしょう。十分浸しておいたので、違いが見えるでしょうか。(スポンジを水から出す) そうですね、すっかり軟らかくなって水をたくさん吸っています。水がしたたって、周りが濡れてしまいました。信徒が聖霊の洗礼を受けるとこのようなことが起こります。私たちの心が柔らかくなり、神の御霊と愛と力があふれるのです。

ルカによる福音書の学びでは、イエスに焦点が当てられていました。それは、福音書は私たちの主であり救い主であるイエスの話だからです。しかし、使徒言行録をこれから学ぶにあたり、その大部分が、聖霊がどのように弟子たちをとおして働き、教会が生まれたかという話であることに気づくでしょう。もちろん、聖霊は常にイエスを指し示すお方ですから、イエスのこともたくさん学ぶでしょう。

今後の学びでこれらのことをもっと詳しく学んでいきます。しかし、今日みなさんに覚えていただきたいのは、みなさんにはとりなしてくださる二人の弁護者がいるということです。それは、私たちの主イエスと聖霊です。そして、イエスを主であり救い主として信じたなら、聖霊はすでにあなたの心の中におられます。また聖霊の臨在をとおして、イエスもあなたの心におられるのです。

しかし、イエスの力強い証人になりたい、私たちの出会う人たちがイエスに引き寄せられるようになってほしいと願うなら、ほんの少しの聖霊では十分ではありません。それ以上のものが必要になります。御霊の洗礼が必要になります。御霊にすっかり浸されて、イエスの愛があふれるようになる必要があります。みなさん、聖霊に満たされることを日々祈り求めてみてはどうでしょうか。初めての人も、何度も体験した人も、神の御霊に満たされる必要があります。そして、私たちが求めるなら、与えられます。

最後に、ルカ 11 章 9-13 節を読んで終わりたいと思います。「そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。11:10 だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。11:11 あなたがたの中に、魚を欲しがらる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。11:12 また、卵を欲しがらるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。11:13 このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

V. 祈り